

春燈

10月号

2020 October



成瀬櫻桃子の句

紫蘇の実や母亡きあとは妻が摘み

「日本大歳時記」（講談社）

「日本大歳時記」（講談社） 紫蘇の実と言つ香りと歯触りの良いものを摘む。庭の一隅か、裏畑に一畝ぐらい植えてあったのであろう。紫蘇の実と葉を塩漬にした後、梅酢に漬けると鮮やかな色と香りの漬物が出来る。これを胡瓜や青瓜と漬けると誠に美味である。奥様も母上の味を家の味として伝えてゆく。家族のやさしい息遣いが聞こえてくる、母と嫁のさりげない景と共に、おだやかな秋の一日が過ぎて行く。

中村紀美子

成瀬櫻桃子の句

ラスコーリニコフめきて白夜の階のぼる

『風色』昭和四十八年

白夜の薄明の中『罪と罰』のラスコーリニコフのような行動への誘惑にかられ、ゆつくりと階段を登る。自分もいつ罪を犯すか分からない弱さを持った人間であるという師の正直な告白に、私達も光明を見出す。己の負の部分を含めてあるがままの自分で良いのだと。夜ではあるが闇に閉ざされているわけではない「白夜」という季節が救いである。

川崎真樹子

安立公彦

つぶらかに向日葵の黄の時刻む

梅雨明の今日の夕日を拝むや

孟蘭盆会夕星慈愛の彩なせり

蝸のこゑの澄みゆく夕爾の忌

口遊ぶ「長崎の鐘」夜半の秋



燈下集

○ 林 紀夫

寡黙なる男の起居夏衣

寛川づる水の匂ひや冷し瓜

放屁虫笑ひの壺に落ちにけり

李白杜甫と美祿一碗月の客

馬の背を音無く霧の包みけり

○ 中野さき江

手火花やふたりの火花からませて

涼しさや見返る少女の目の細く

過去の夢おろかに髪を洗ひけり

ままならぬ事に迷はず水を打つ

藤椅子の祖父父見ゆる夕ごころ

○ 栗原完爾

凌霄花散らしてぐるる医家の門

引き抜けば朱根はしらす鴨足草

灯に落ちて暫しかがやく金亀子

桑の実に口汚したる疎開の日

仕舞湯に浮人形と浸るかな

○ 岩永はるみ

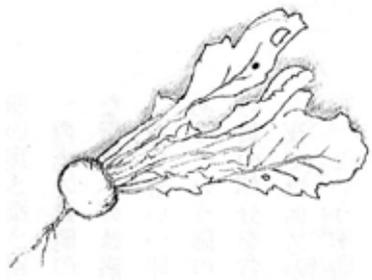
海の日に生まれし少年留学す（海十八歳祝人字）

男には懐かぬ猫よサングラス

恋の字を書かぬ恋文百日紅

白日傘まはして角を曲りけり

友癒えよ初秋の風ふところ



○ 小菅礼子

くちなしや良き香のさそふ庭の朝
半夏生ひとり気をもむ事のあり
梅雨晴や明るい顔に戻りたし
梅雨長し鳥も来ずなる庭淋し
枇杷熟るる運はも天にまかせけり

○ 本多遊方

蟬鳴けり雨のあがるを待ちきれず
長き梅雨明けて植木屋いきなり来
蓮咲いて仏も我も無かりけり
白南風や緑青しるき堂の屋根
たたずめば独りの影や百日紅

○ 武田巨子

青東風を聴き分けてゐる牧の馬
雪溪の足跡に歩を重ねゆく
篝火に深まる闇や涼み能
躡り口露地の涼風通りけり
母の忌や母の袱紗の夏点前

○ 諸岡孝子

一つづつ卵割る朝秋浅し
新盆の子への言問ひ西あかり
生愛し身をしばりつつ鮭上る
小面の小さき相槌無月かな
遠かなかな父母知らぬ世を生きて

○ 小泉三枝

青葉木菟夜は相聞の道祖神(禰・紫崎御夫妻)
女手を語りて梅雨の母娘星(禰・赤羽様)
紫陽花の色整はぬ別れかな
潮風にひと日吹かれし髪洗ふ
満ち潮の消波ブロック蟹走る

○ 平野加代子

強がりの今日の香水決めにけり
バンダナの赤をきりりと溽暑かな
金魚の泡ふはこの世に物申す
埋もるる小さきわが身や蟬時雨
子が作ればアラブ種となる瓜の馬

○ 田嶋洋子

紺青の湖面を透かす投網かな
緑蔭に多弁と寡黙集ひけり
雷鳴の先立ち厳父天降りけり
山法師の深山を恋ふる香りかな
サンガラス家近づけば外しけり

○ 金山雅江

ハンモック犬も眠れる荘の屋
夏帽子ちよつとガルボに似せてみせ
夏足袋に力をこめて出番待つ
勝鴉故郷にまだ友の居り
六地藏の前だれ赤し炎暑来る

○ 菅澤陽子

白百合の薫れる庭やティータイム
ことごとく開け放つ窓今朝の秋
いさぎよく一事治むる大暑かな
「夢」の額飾り葉月の美容院
端溪にひかる墨色夏書かな

○ 太田佳代子

四阿にひとつの背中蟬時雨
朝もはや昼となりけり夾竹桃
緑蔭や郵便受の異国文字
仕舞込むダイヤの指輪明易し
蜜豆や忘れてもよき事ばかり

○ 長谷川歌子

赤で記す今日の予定や朝曇
「無事でね」と別れの日傘まはしけり
石垣の反り大らかに蟬時雨
こもり居に節目の淡き夏休み
炎帝に臆せぬ球児疫飛ばせ

○ 久保久子

くちなしの香りまとうて逝かれけり(禰・赤羽様)
空蟬を透かせば黄泉の見え隠れ
独り居に慣れて琥珀の梅酒かな
梅雨深し己が諾ふ己が癖
居を正し和する読経や魂まつり

余言

安立公彦

大川の風をゆたかに軒簾

佐藤 信子

「大川」を辞書に当たると、①大きな川、②東京都内を流れる隅田川の吾妻橋付近から下流の異称、③大阪市中を流れる淀川下流の異称。辞書の解説を見ても俳句の趣には程遠いが、現実の俳句には、その大川の歴史と詩情を豊かに表現している句がある。掲出句に詩情の一例を見る。

「大川の風をゆたかに」に頷く人は多かろう。現実の隅田川は、巨大な建造物に挟まれているが、川の流れは生きている。見詰めていると、その川面をゆたかに吹き渡る風を感じとる。座五の「軒簾」が、「大川」の姿を、句を見る人の心に写し出す。そこには詩情のそれぞれの有り様に包まれている「大川」の流れが、「軒簾」と共に在る。

帰省子にハンカチの木の夕映ゆる

松橋 利雄

「ハンカチの木」は、高さ二〇メートルに達する落葉高木。角川文庫本『俳句歳時記』に登場する。花は「ハンカチの

木の花」。垂れ下がる大きな白い包葉がハンカチを思わせるところからこの名が付いた、とある。

作者は、帰省したお子さんが庭に立つ姿を見て、この句が浮かんだのだろう。夕映えはハンカチの木を包み、それを見る帰省子の姿と共に、様々な思いが湧いて来るのだ。帰省子と、ハンカチの木の取合せがみごとである。

弥勒仏思惟のすずしき頬の指

太田 慶子

この弥勒仏は、京都広隆寺の「半跏思惟像」だろう。左脚を垂れ、右脚を曲げて腰掛け、右手を頬の辺りに挙げて思考にふける姿の弥勒菩薩像。眼はかすかに閉じ、頬に触れむばかりの指は人差指か。耳の長い、ふつくらとしたお顔は、神々しさとともに、親しみに満ちている。

作者はその姿を、「思惟のすずしき」と表現する。まさにその通り。更に「頬の指」に無言の安らぎを覚える。一度拝したら忘れられない姿だ。表現もみごとである。

凌霄花散らしてぐる医家の門

栗原 完爾

寸劇を観ているような句である。「凌霄花（のうぜんばづら）」は蔓性落葉樹。節々から吸根を出して他物を這い上る。夏、茎頂に橙赤色の大花をひらく。

この句、体調をくずした作者は、今近くの医院を訪ね門を通る。ふと視界を橙赤色の物が過るのを感じ、見ると、医家の門脇に咲いている凌霄花と知る。私たちは或ることに思いを集中していると、他の実体を見失うことがある。然りげ無い表現が、そういう思いを善く表現した句だ。

梅雨雲をほらふ少年新棋聖

藤原 若菜

七月十七日の新聞を開いた人は、一面に掲載の、「初戴冠」の色紙を翳す和服姿の少年の姿に見入ったことだろう。「藤井七段最年少タイトル」の見出しの脇に、「17歳11カ月棋聖に」と、活字が輝いている。それ迄は、屋敷伸之氏の、18歳6カ月が最年少タイトル記録だった。

作者は今その新聞を手に、棋聖の若返りに共鳴を覚えるのだった。純粋な若返りは何ものにも優る。その記事は、それぞれの人にそれぞれの思いを抱かせたことだろう。

橋の灯の水にきらめく晩夏かな

小山 繁子

「橋の灯」が善い。辺りが薄暗くなり橋上の外灯が点ると、俄然、橋は活きてくる。この橋は古風な石橋か、または、巨大な鉄筋コンクリート造の橋か。何れの橋も、日暮と共に詩情を帯びて来る。それは川（河）という水の流れの故である。橋の灯はその川の流れを煌めかせる。

この句はそこ迄で、佳く「橋の灯」を活かしている。この「晩夏かな」は作者の詠歎である。充実の座五である。

遠かなかな父母知らぬ世を生きて

諸岡 孝子

今年の立秋は八月七日。梅雨が長かった分、立秋を過ぎからの猛烈な暑さは厳しかった。加えて新型コロナウイルスの大流行である。こちらは全世界に及んでいる。

こういう日々の或る日、作者はふと、「父母知らぬ世」が脳裏を過るのを思う。親から子へと続く「世間」は、親が居る内は一体だが、親が逝き、やがて我が身も高齢となると、「父母知らぬ世」を改めて思うようになる。「生きて」が活きている。「遠かなかな」に詩情を感じる。

髪洗ふ疫下の街を戻り来て

小倉 陶女

新型コロナウイルスは一体いつ鎮静化するのだろうか。八月十二日現在、世界計二〇二九万人、死者七十四万人。最多は米国五一四万人、死者一六万人、日本は五万人、死者一千人。書いても仕方の無いことだが、つい書きたくなる。作者は今、所用のため電車を使い、用件を終えて帰宅し

当月集

安立 公彦選



○ 室井津与志

医食同源男厨の麦の飯
揚花火籠もる聖火の鬱散す
参勤の古道漫歩や閑古鳥
みんなや自肅の里にまた力む
昼寝覚卒寿祝ひのベッドに居

○ 田中嘉信

木洩れ日を拾うて歩く夏木蔭

振り向いて小さく手を振る白日傘

軽々と水溜り跳ぶ跣の子

絶え間なく岩打つ水や旱星

多摩川の風の抜け道夏木立

○ 山浦紀子

花柚子のはづんで落つる夜の静寂

門限を過ぎし言ひ訳遠花火

台ぶきん洗ひ上げさて梅雨厨

仙人掌の刺の鉤先赤く透く

便り欲る梅雨のポストに鴉かな

○ 佐俣まさを

雨激しなほ天を指す立葵

紫陽花や山門雨に鎮もれる

朝靄を辿る杣道行者滝

城跡へ喘ぐ坂道岩清水

釈迦堂へ続くせせらぎ糸とんぼ

○ 宮崎紗伎

よく爆ずる手花火の腕のぼしきる

仲見世の庇の下の残暑かな

花木槿喪服の匂ひ近ぢかと

浄め塩振るもつくつく法師かな

塩加減よき猫舌のむかご飯

春燈の句

安立 公彦選



茄子の花術後を久の散歩かな

燕の子並び見てゐる驟雨かな

夕闇のくちなし香る生家かな

形代に流行疫病ながしけり

今は昔水屋上げ舟梅雨出水

木曾三川おどろおどろの梅雨出水

降り続く雨に青柿濡れて落つ

落つるまで実らせ愛づる夏みかん

反転の金魚ゆらりと緋を翳す

裸子の襦袢にあまるまろき尻

予後の身に何を急かすや蝉しぐれ

炎天に燐寸のほむら見失ふ

可惜夜の故山を偲ぶ螢の夜

一灯をともし野にあれ夏あざみ

栃木 森 ぶく

岐阜 種田 利子

京都 小西みさを

岐阜 高井 修一

夕焼や老犬抱き帰り来る

目眩くときの流れや月涼し

荒梅雨の一日鬱々過ごしけり

かはら職人手捌きよろし梅雨晴間

朝採りの友に届くる茗荷の子

青柿や大きな音させ池に落つ

金魚草水無き庭に揺れにけり

初もののトマトの赤をまづ愛づる

災ひの来るかそはつく蟻の群れ

白百合の仏間に匂ふ夕べかな

夕焼けて笠雲富士のほしいまま

梅雨茸の翌日は消ゆるはかなさよ

十薬の庭の一角占めてなほ
徒広き空に一片夏の雲

東京 西谷恵美子

京都 村上 國枝

神奈川 望月 郁江